

# 保育を考える： 子どもの遊びからつながる保育を考える

メタデータ	<p>言語: jpn</p> <p>出版者:</p> <p>公開日: 2021-05-11</p> <p>キーワード (Ja):</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者: 谷, 裕子</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/00028709">http://hdl.handle.net/10098/00028709</a>

# 保育を考える

(子どもの遊びからつながる保育を考える)

谷 裕子

## I. はじめに

「これでいいのだろうか。」「今の保育でこのまま進んでいいのか。」私たちは40年以上人権をテーマに掲げつつ一人一人を大切にしている保育を行ってきたつもりだった。子ども一人一人の人権を考え、しなやかな心と体を作ることを目指してきた。それは間違いではなかったと思う。しかし果たしてこのままでいいのだろうかとの思いに駆られていたのも事実である。それまでの保育は、当時の保育指針から6(5)領域の教育的な課題を子どもたちに与える保育者主導の設定中心であったり、また自由保育と言われる子どもの遊び中心の保育であったりした。時代とともに私たちも迷い、それぞれの年代の保育者が養成校で身に付けてきた保育をしていたに過ぎなかった。というのは言い過ぎだろうか。

小学校入学前機関として高浜町には4つの公立保育所があるのみであった。町議会等からは幼稚園、認定こども園との差異を問われ、認定こども園招致の話も定期的に湧き上がってくる。その都度、保育所も幼稚園や認定こども園と同等の幼児教育を行う場であり、私たちも幼児教育を十分意識して保育を行っていることや、日々の生活や遊びが小学校の教育に繋がっていくこと「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域を踏まえて保育していること、その5領域が小学校教育に繋がっていることを説明したりしてきた。町内のほとんどの子どもが4つの保育所に入所してくることに責任はわかっているつもりである。正規職員全員が保育士資格とともに幼稚園免許も取得している。そして、町内に他の入学前機関がなかったことも踏まえ公立保育所として教育を意識しつつ保

育を行ってきている。町外の研修にも積極的に参加させ、町独自でも講師を招き研修会を年に何度も開催している。しかしその学びもそれぞれで、町としての保育が同じ方向を向いているわけではないのも事実である。

福井県保育研究大会の研究発表が高浜町立保育所として、平成32(2020)年に予定されていたことも有り、平成27年に高浜町4保育所合同で、保育実践研修グループを立ち上げた。その時講師としてお願いしたのが福井大学の岸野麻衣先生だった。岸野先生は以前、福井大学で開催された幼児教育の研修で子どもの遊びから育つ保育について話されていた。子どもが主体的に日々の遊びを展開し、その遊びが運動会や発表会につながっていくというものだった。その時参加した私を含む3人は、「こういう保育がしたかった」のだと興奮しながら話し合ったのだった。しかしその方法がわからないから今までも漠然とした思いのみを話し、話の合う者同士が会話し、それぞれに保育をしていたのだった。そんな思いを改めて管理職間で話し合い今回保育を研究するにあたり岸野先生にお願いしようということになった。

ちょうどこの平成27年度から福井県の義務教育課の幼児教育センターが、保幼小接続の研修で幼児教育アドバイザーと園内リーダーの研修を開始していた。アドバイザーには私を含め所長が2名、園内リーダーには小規模保育所を除く3園から主任級の保育士が1名ずつ参加した。幼児教育センターの研修も福井大学と連携しており方向性は同じだと思えた。とにかくみんなで保育を考え学ぼうという気風を高めるために私自身が積極的に研修に参加し保育を考えていこうとしたのだった。

こうして私たちの保育実践研究が始まった。

## Ⅱ. 保育を見直すために

### 1. 公開保育をする

#### 1) 保育実践グループを立ち上げる

今後の保育のことを考え、5年後の研究発表を見据える  
と実践的な研究をする為に初めにしなければならない事  
は保育を皆で見合い考えるための公開保育だった。私た  
ちは誰も公開保育というものをしたことがなかった。公  
開保育を見に行くことはあったし、参観日などに保護者  
に保育を公開することは勿論毎年しており、小学校の先  
生等が子どもの様子を見に来られることはあった。しか  
し、いざ他の職員に自分の保育を公開し、それをみんなで  
話し合うとなると、抵抗があることは安易に想像できた。  
だからと言って、すでに管理職になっていて担任を持た  
ない私たちが保育を公開し、検討材料となることは不可  
能だった。たとえ1度や2度は出来たとしても、それで  
は繋がらず継続的で実践的な学びにはならない。そこで  
実践的に研究の中心になるグループを立ち上げることに  
した。

保育を公開してくれることに抵抗の少ないであろう若  
手職員を中心に小規模保育所は1人、他の3保育所から  
各2名ずつの研究グループの構成を決めた。初めに研究  
してくれる職員を募ったが、自ら手をあげてくれたのは  
1名だけで、結局他のメンバーは所長間で相談し指名す  
る形になった。こうして7名の実践保育研究グループが  
集まり、いや集められ、そしていよいよ始動していく。

7名の職員は自分たちのグループ名を「ぴっか」と名付  
けた。子どものひらめきを大切に、そしてそのひらめき  
に敏感になれる保育者になるという思いを込めていると  
の事だった。少なくともぴっかメンバー7名と、所長たち  
は「子ども主体の保育」というものに理解を示し、そこを  
考察していこうとしていることが共有できていると思え  
るネーミングだった。こうして若手職員が中心となり保  
育実践を見直し、お互いの子どもを見る目を高め、保育の  
質の向上を図るための研修がスタートした。

研修のスタートにあたり、ぴっかのメンバーも課題を  
話し合っていた。

- ・子どもが指示待ち的である
- ・子どもが保育者の許可を求める。
- ・子ども自身が主体的に遊べていないと感じる。

これは、所長たちが気になっていたことと同じだった。も  
っと言うならば保育者が遊びを楽しんでいないのが気にな  
っていたのだった。そこが気になるから保育の見直し

をすべきではないのかと話し合い、研究テーマに掲げた  
ところだった。

職員も感じていたのだと改めて分かった。では、子ども  
が主体的に活動するようになるためにはどうすればいい  
のか、どのような保育をすればいいのか。

#### a. 公開保育1年目

平成27年度、おそろおそろ公開保育を開始する。7月  
には青郷保育所、10月高浜保育所、12月和田保育所での  
実施であった。とにかく始めた公開保育だった。まだその  
頃は何を見てもらうのか、何を見取るのか、まったくわか  
らず雲をつかむような話だった。

まず7月の青郷保育所の公開保育では、岸野麻衣先生  
に来町していただき、その年の保育アドバイザーと園内  
リーダー研修の参加者、ぴっかメンバーが中心となり見  
取りとその後の振り返りを行うことにした。保育所なの  
で子どものいる時間に多くの職員を参加させることがで  
きないということも有ったが、何より方向性がわからな  
いので参加者全員が一同で話し合える人数にしたという  
こともあった。保育の何を見るのか特に具体的な打合せ  
もないまま、思い思いに見学し、その後の振り返りで話し  
合いをした。しかし参加した職員それぞれがそれなりに  
感じたことがあり、子どもの姿について話題が出てきた。  
また、公開保育をした青郷保育所の職員からは、保育の悩  
みや疑問、自分なりの工夫も出され、雲をつかむようなス  
タートではあったが、「して  
よかった」というのが印象  
だった。そうすると、他の  
保育所も公開保育をしたい  
という流れになり、スムー  
ズに高浜保育所と和田保育  
所に繋がっていった。



10月の高浜保育所の時、私は保育を公開する側の所長  
として緊張していた。高浜保育所は3歳以上児各2クラ  
スと、未満児を含む全園児140名以上の大規模保育所で  
ある。2歳以下は2階の部屋に全クラス配置。3歳以上児  
は本館棟と別館棟にそれぞれ3歳児、4歳児、5歳児を一  
クラスずつ配置している。各棟に部屋が3部屋ずつであ  
ることもあり、日常の中からの自然な異年齢の交流を意  
図していた。40年前この保育所を新設した時には、3歳  
以上児が3クラスずつだった為の保育室配置であるが、  
今は2クラスずつとなって、未満児が増加している傾向  
である為、数年前に職員間で話し合って以来のクラス配  
置であった。

同年齢であっても、毎日同じ活動をする必要はなく、クラスごとの特色があってもいいのではないかと、年齢の育ちは、週案や月案を基に大きく目指すところを決めておき、アプローチはそれぞれの担任のやり方ですということを示し合っていた。

当時の保育は、子どもたちが順次登所すると担任とともに部屋で過ごし、その後みんなで所庭か、遊戯場での活動の後設定保育となるのがおおよその流れで、時に所外保育をすることもあった。担任とともに行動するのが当たり前のようで、殆ど保育者の声掛けで動き管理保育と言ってもいいのかもしれない。何時に登所しても保育室内の玩具で遊び、その後はクラス単位、もしくは学年単位等で保育者が決めた活動をする。というものだった。給食後も玩具で遊び午睡までの時間を繋いでいるに過ぎない。その間保育者は、給食の片付け、保育室の掃除、布団敷きと忙しく動いていた。保育者は頑張っている、しかし子どもの大切な時間を無意味に過ごさせている。少なくとも私にはそう思えた。そこで私は玩具を各部屋から遊具倉庫に片付けさせた。必要なら子どもと共に倉庫に取りに行き子どもたちが選んだ玩具で遊ばせてほしい。しかし本心は玩具に頼らない保育をしてほしいだった。

高浜保育所では、以前から保護者の要望に応じ 18 時 30 分過ぎまでの保育をしてはいたが、ちょうどこの 27 年度から「子ども子育て支援新制度」がスタートし、それにより「保育標準時間」の子どもに対しそれぞれの必要時間に応じた保育の量(時間)の確保のみならず質の向上を図ることが余儀なくされた。この延長保育の時間も大切な保育の時間なのである。そこを思うと、夕方以降の疲れが出てくる時間にする保育は家庭での姿に近いものが望ましいように思えた。であるならば日中の保育は集団活動の中でしか経験できないものや、保育所だからこそ出来ることを主に経験させてほしいと考えていたのだった。職員も理解してくれたからか、逆らえない雰囲気だったからか、日中玩具で遊ばせることは 3 歳以上児のクラスにおいては殆ど無くなっていた。

そのような高浜保育所の公開保育は、ぴっかの若手職員のクラスを中心にってもらうことになった。日常の中の廃材遊びを中心にした様子と、少しずつ始めていた子どもの振り返りの時間を主に見ていただいた。参加者から様々な意見をいただき、高浜保育所としてはまず 1 日の保育時間の設定を見直していくことになった。

公開保育後、この日中心に見ていただいた 2 年目の O

保育士と話をした。公開保育をしてくれた事に対する労いのつもりだったが、この時、この職員は「公開保育は、はじめ緊張した。しかし色々なアドバイスを貰うと、もっと良くしていこうと思えるし、また変わった自分も見えてほしいと思う。」そう言ったのだった。驚き、嬉しかった。このような考え方ならいい。希望を持てた日になった。

その後和田保育所も公開保育を終え、次年度に向けた検討をぴっかが中心になり行った。

次年度への取り組みとしてぴっかから提案されたことは、

- ・夏前、秋、初冬とでは子どもの活動の様子も異なる。
- ・保育所が変わると研究として一貫して検討することが難しい。
- ・保育を見直すのなら 1 保育所で年間の様子を見ていくのがいいのではないかと。
- ・子どもの人数が多く、必然的に職員数も多く、新採用の職員を配置することが多いため連携という視点で一番難しい高浜保育所で見ていこう。

以上の理由から、次年度は高浜保育所を継続的にみて検討したいというものだった。

これには、所長会も賛否両論だった。私は、基本的にぴっかの考えで行こうと思っていた。しかし別の所長からは、それでは他の保育所の職員が育たない。との意見が出された。すでに公開保育で育つものがあることを感じていたのだ。確かに一理あった。職員の育ちを考えるなら、それぞれの保育所を見合い検討すべきかもしれない。しかし保育の見直しを検討するのなら 1 保育所を検討していくのがわかりやすいように思う。所長会、ぴっかともに再度話し合いをし、私が調整する形でぴっかの考えを尊重することで決着したが、その代わり以下のことを決めた。

- ・他の保育所も公開保育をする。
- ・その際講師は招聘しないが 4 保育所の職員間で交流し保育の見取りを行う。
- ・高浜保育所に講師を招聘した際、他保育所の事例検討も行う。
- ・各保育所の公開保育についても教育委員会、小学校などには案内をする。
- ・高浜保育所はあくまで 1 検討材料である。公開保育に参加した職員はどの保育所に参加しても、自園にその様子を持ち帰り、即日、または出来るだけ早い日に報告をし、全員で共通認識を持つ為の振り返りをする。

そうすることで、1 保育所継続の見取りと検討も出来、町職員全体の意識も上がるのではないかと。私たちはぴっ

かに実践検討を踏まえた研究の方向性も任せつつ、所長間で疑問を出し話し合い、全体のバランスも大切にしていこうとした。他の所長たちがそれぞれの保育所の職員を大切に思う心があったから、全体の育ちのことを話し合う事ができた。この時私は、筆頭所長では有ったが、一番年齢は下だったこともあり、率直に話し合う雰囲気があったと思う。私が独断型であったならばびっかの思いだけを尊重してしまい、ここまでのことを考えられなかったかもしれないと思う。保育を考え直すことが目的なのに、研究ありきとなればそれは本来の目的とずれてしまうところであった。全体を掌握する立場でもありながら、細部にまで考えの及ばなかった自分の幼稚さが恥ずかしくもあるが、今でもこの時決めたことはこれで良かったと思えるのである。そして、公開保育に参加したら必ず各保育所の職員間で報告、振り返りを行うことがこの時から定着したのであった。研修に参加したら報告は当たり前のように思うが、それを検討しあうことまでは出来ていなかったのである。報告を基にしてまさしく明日からの保育に生かす話し合いができるようになってきたのである。

#### b. 公開保育 2 年目：日常の保育を公開する

こうして高浜町の公開保育 2 年目がスタートし、同時に検討材料としての高浜保育所の年間 3 回の公開保育もスタートした。ここで活躍してくれたのは、びっかの若手メンバーの一人 U 保育士である。1 年目の公開保育では O 保育士のクラスを中心に見ていたので、U 保育士自身、今年度は自分のクラスが公開保育の中心になることを理解してくれていた。昨年の公開保育を経て、課題が挙げられたわけだが、とにかく高浜保育所に於いて見直していかなければならないこととして以下のことがあった。そこを見直していくことで、他の保育所も参考にすることができる。という考え方である。保育所ごとに環境や園児数、職員数などの違いはあっても、子どもの見取り方の方向性は同じでありたいと考えていたのだった。

- ・デイリープログラム (1 日の流れ)
- ・保育所全体の連携
- ・保育(遊び)そのものの継続性

これらのことを意識しての 2 年目の公開保育だったので、保育士たちはそれぞれに子どもがやりたいあそびを一緒に楽しみ共に発展させていくことを意識しながら工夫し取り組んでいた。

U 保育士は、4 歳児青組の担任だった。日ごろから振り

返りの中で子どもの言葉を聞きとり子どもたちと共に遊びを決めていく保育を心掛けていた。春から、積極的に楽器遊びが始まり、手作り楽器、衣装づくり、そしてパレードへと繋げていた。子どもたちも楽しんでいたり、自主的に活動しているように窺えた。パレードの人数も増減することもあったし、クラス全員で行うこともあった。出かけていくクラスも様々だった。見た目は工夫した保育が展開されているように思えた。また他のクラスもそれぞれに、子どもの振り返りの時間を持ち、クラスそれぞれの興味に応じた保育を展開しつつあった。5 歳児のクラスでは、CD をかけテラスで自由に踊り、運動遊びに夢中になるクラスもあった。他の 3 歳児クラスも、もう一つの 4 歳児クラスも子どもたちと遊びを展開していた。そんな中での公開保育当日、青組のパレードが始まった。所庭を子どもたちが練り歩いていく。が、それほど楽しそうに見えない。まわりの子らも砂場で遊んでいた 2 歳児たちが保育士と共に手拍子したりするくらいで、そのほかのクラスは反応が薄かった。なんだか後味の悪い感じがした。

この公開保育の後も公開保育参加者で振り返りが行われた。アドバイスや、青組の子ども姿についての感想も聞かれた。しかし具体的な言葉こそ出なかったが、参加者の思いは私と同じだったのではないだろうか。

そのあとは、高浜保育所での振り返りがあった。この時私は参加しなかったが、報告をきいた。職員も色々な思いがあったようだった。「公開保育だから、盛り上げないといけないと思ったが、どうしていいかわからなかったから、場所を譲った。」そこが避けたように見えてしまったのか・・・。「パレードが来たから自分たちが踊っている音楽が邪魔をしてはいけないと思った」だからダンスの音楽の音を絞った、結果子どもが踊るのをやめた。「いつも来てくれていたから、少し子どもが飽きてきたかな～」などの話が出てきたという。それらのことが結果的に日常的に連携していない形を明白にした。そして、公開保育に照準を合わせた活動をしていたため実際には他クラスだけでなく、青組の子ども達も少々飽きてきていたのではなかったか。まだまだ始めたばかりの公開保育で、私もそうだったが、職員全体に肩に力が入っていたのだと思わされた出来事だった。

U 保育士、O 保育士とも高浜保育所では最も若い 2 人で、全体を牽引していくのは負担が大きいというのもあったが、どちらも意欲的で理解力もあった。私は良くこの 2 人と話をした。とは言っても 3 人で話していても私自身が具体的な提案をするわけではなく、びっかの中での困りごとや、保育所内での困りごとを聞くことが多かった。

ぴっか、保育所のどちらの話し合いも議事録があり、それを見れば決定事項や、問題点などは把握できたのではあるが、3人で話すのはその記録に残せない、いわば雑談である。しかし時にそれは本音であることもあり私自身の行動を示唆するものになることも多かった。そんなことから、この日も公開保育のことについて話をしていた。私の感じたことを素直に話し、いやな思いをさせたのではないかと言った。ぴっかの他のメンバーからも同様の言葉があったということだったが、おかげで課題が明らかにされ、今後の方向性が見えたということではあった。しかし私が一番に気にしていたのは、U保育士が孤独を感じ必要以上に傷ついていないかということだった。ぴっかや高浜保育所の話し合いの中で出された意見で理由は分かり頭では理解していただろうが、それでも心配だった。

U保育士は言った「反省はするけれども後悔はしません」若い、私よりも心が強い。本心からではないかもしれない、それを信条にしている言葉かもしれないが、有難かった。そしてまた、「これならいける」と思ったのだった。

そして、この時の反省から子ども達はより自由に保育所内を動き回り自然な交流も少しずつ出来るようになった。こうして公開保育は1つのクラスを見るという形ではなく、保育所全体の公開の形に変化していった。

1日の遊びの熟成度を考えて保育時間の設定の見直しをしていくなど、話し合いを重ねる中で職員一人ずつが工夫をしていったのである。子ども達は、登所すると、身の回りの片付けを終えたら、クラスでしたいあそびをしても良いし、他のクラス、遊戯場、所庭など自分のしたいあそびが出来るところへ行くようになった。勿論それには近くに保育者がいる事が条件ではあったが、みんなで見ていくということを確認し合うことで、保育所全体の交流が当たり前になっていったのだった。公開保育をするごとに検討、見直しを重ね公開保育は高浜町の全保育者にとって特別なことや、特別な日ではなくなっていたのだった。

保育者にとっては公開保育であっても子ども達にとっては毎日の中の1日である。だからその日に向かって何かするのではなく、たまたまの1日の活動を公開するだけでいい。だからこそ日々の遊びを大切にしていこうという、そういう当たり前のことが心掛けられるようになったのである。公開保育をするたびに色々なことに気づき、そこを見直していくということが職員全体に少しずつ

出来るようになっていった。

## 2. 保小の接続を見据えた公開保育をする

公開保育を始めて3年目に入ろうとしていた。公開保育を始めた時から、担当課、教育委員会、各地区の小学校にも案内を出していた。私たちが保育に真剣に向き合っていることを分かっていたいただきたいとの思いからだ。その思いを汲んでくださり、それぞれの方たちが短時間でも参加しようとしてくださっていた。この2年の間、年複数回の公開保育をするうちにある程度の1日のプログラムができていた。午前中保育を参観し、11時頃からは子どもの振り返りの様子を見学、午後からは午前中の保育についての見取りと、そこに至るまでの経緯などを写真や映像を使って検討するという形に定着していた。しかし保育所外の参加者がいかに参加しようという気持ちがあろうとも平日の公開保育において、朝の公開保育から午後の職員間の振り返りまでのすべての時間に参加していただくことは難しかった。

### 1) 小学校との接続、連携

公開保育を始めて3年目、平成29年度に入ろうとする頃、嶺南教育事務所から、思いがけない依頼があった。保幼小の接続と連携を見据えて高浜町が取り組んでいる公開保育を、高浜町の小学校はもとより嶺南4町の就学前機関等にもモデルケースとして公開してほしいというものだった。当初、私が直接この話をいただいたのだが、思ってもみなかった提案に驚いた。

公開保育を始めたのは、自分たちが保育の見直しを行うことの手立てであること。公開保育をすることを目的としているのではなく、子ども主体の保育を目指そうとしているその姿勢を知ってほしい、常に学び考え、保育を工夫していることを理解してもらいたいという思いで各関係機関への案内を出していること。保育は模索段階だし、決して自信があるわけではないことも強く伝えた。

しかし、これは紛れもない良い機会でもあった。断るべきではない。高浜町の保育者の学び続ける姿勢を評価してくださっているのであるならば、そして他の嶺南4町への保幼小の連携の話題提供として捉えていただければ、ということです承したのだった。

こうして、嶺南教育事務所と、町教育委員会、保育所の主管課が調整する形で各小学校、及び嶺南4町への公開保育が実現していった。勿論、県の幼児教育支援センターのバックアップをいただいたことも大きかった。幼児教育支援センターは26年度から毎年、接続の大切さを教職

員、保育者同時参加の研修会で話してくださっていたのだった。保育所は小学校の学びの姿を、小学校は保育所の学びの姿をお互いに見合い、理解していく必要があり、そのためには公開保育は有効な方法であるが、なかなか自分たち主導では、きちんとした形にすることは出来なかっただろう。各関係機関の援助がある中、夏季の小学校教諭対象の公開保育が確立されていったのである。

#### a. 保幼小接続研修（公開保育）にむけて動き出す

平成 29 年 8 月 23 日、日程の調整を重ね、高浜町保幼小接続研修～公開保育と振り返り～が行われた。

保育所なので、夏期休業というものはないが、それでもお盆の期間は子どもの出席も少なく、8 月の終わりからは運動会に向けた活動が主になってくる。保育所としては、望ましい日程ではなかった。しかし、大切なのは小学校の先生方に参加していただけるということである。しかも何度も言うが、公開保育は日々の積み重ねの単なる 1 日、どんな遊びも子ども達と作ってきたもので、運動会も同様である。子ども達が興味ある活動を展開、発展させたものを運動会にするのだ。運動会の為の練習の積み重ねの保育に終始してはしていないのだから、8 月 23 日でもいい。職員はいろいろ思うところはあったようだが、この時私はやや独断的にこの日を了解したような気がする。

夏季の公開保育を突然に実施するのは、職員たちも不安だったようで、春にも 4 保育所間の公開保育をすることになった。この際にも各学校に案内を出すなどはしたが、基本的には 4 保育所職員間でのこととした。春の日程については、日常の 1 日を公開するだけだから、行事日以外なら、いつでも良い訳である。年間のスタートなので気負わずに初めてもらいたかった。結果日程は新しいクラスにも慣れた 5 月下旬から 6 月中の 1 日を 4 保育所順に公開保育を行うことになった。

こうして 29 年度から、春は 4 保育所職員間の、夏季は小学校教諭対象の、秋から冬にかけては年間の総まとめ的な形の公開保育が、各保育所年間 3 回の形で出来上がった。年間の公開保育の回数は増えたが、1 年間の見通しもつき、正職員の殆どが自園以外の 3 保育所の様子を自らの目で見るできるようになった。おかげで職員が公開保育参加に積極的にもなり、1 年間を通して適度な緊張感を保ちつつ、保育を公開するということに対して身構えなくなっていくのは、思ってもみなかった効果だった。こうして公開保育は必然になっていった

のである。

#### b. 保幼小接続研修～公開保育と振り返り～

高浜町は 4 地域に分かれており、地域ごとに 1 小学校、1 保育所がある。各保育所には地域の小学校入学生の 9 割以上が在籍している状況であった。接続、連携がしやすい形と言えるかもしれない。そんな状況なので、各小学校の教員は同地域の保育所の公開保育に参加するのが当然のようであったため小規模保育所においても同様に公開保育を行うことにした。夏季の公開保育では 4 保育所でのびっかのメンバーを中心に保育所ごとに春からの流れを知らせ、夏の遊びに繋がってきていることを図にしたりし準備をしてくれた。

当日の時間設定は

- ① 8:30 スタート、自由に子どもたちの遊びの様子をみていただく。
- ② 11:00 頃から各クラスの子どもの振り返りを見学
- ③ 11:30 公開保育参加者と、保育所職員の代表での保育の振り返りを行う。

どの保育所も大体同じプログラムで行った。

- ① については、保育所の子ども達は順次登所して来て、思い思いに遊びを始めるので、実際には何時から参加されても差し支えなかった。
- ② については、クラスの様子で若干時間差があるが、3 歳以上児については給食までの時間を使って行っている。子ども達にとっては、あそびと振り返りで 1 つのつながった活動なのでこの姿はぜひ見ていただきたかった。
- ③ まず保育所側から、春からもしくは前年度から繋がっている遊びの姿を踏まえ、当日の子どもの姿について説明をした後、参加者の皆さんのご質問やご意見を聞かせていただいた。

職員の研修の初めに私の方から簡単にご挨拶をさせていただいき、公開保育の趣旨を話させていただいた。あくまで日々学びの途中であることを強調した。厳しいことを言われ、職員が委縮してしまわないか、とにかくそこが心配だったからだ。

他町の就学前機関からも参加者があり、各保育所に分散参加していただいた。自由に動き回る子どもたちに関して驚きつつ、安全管理について質問が出たこともあった。クラスに縛るのではなく保育所全体で見ていくことを大切にしていることなどを話した。小学校からは、どの地区も 5～10 名程度の参加者があった。普段は交流の

ない高学年の先生が来てくださり、集中して自分の遊びを展開していることや、子どもたちがリラックスした姿ではあるが静かに振り返りに参加していることに率直に驚かれたりした。色々な姿の子どももいる中で、保育者の待つ姿勢を見ていただき、感じられたことを口にする先生もおられた。これらの質問については、殆どが担任や、主任が答えた。正解というのではない。クラスの様子については常に考えながら保育をしているのでその時の自分の考えや子どもの見取りについては話すことができるようになってきていた。自分の言葉で語るという雰囲気がいつの間にか出来上がってきていたのだろう。

この日、2年目、年中担任のK保育士は、自分のクラスの様子について、こう話した。

「子どもたちが、春ごろ船を作りたいというので、一緒に作っていた。船の形や舵について調べたりして楽



しんでいたが、夏になり水遊びやプールが始まると興味がなくなったようだった。今は保育室の端においてある。」

私は可笑しくなってしまった。堂々と遊びが途切れたことを話したからだ。研修の後、幼児教育センターのアドバイザーの先生からは、「職員の皆さんが伸び伸び話をされている。よく育ておられる。」という言葉いただいた。K保育士のことではなかったかもしれないが、そんな風にとらえていただき有難かった。K保育士と話をしたら、船が途中になり、展開が読めなくなって困っていた。そしてそのことを話してしまったことに少し落ち込んでいた。私は「無理に先生が遊びを繋げようとしても、子どもの興味が薄れてしまったなら、様子を見るのも有りだと思う。先生が遊びを繋げようと無理に引っ張らなくてよかったかもしれない。子どもの気持ちをよく見て尊重しているということでもある。子どもの目に触れるところに置いておくということでも工夫は出来ていると思う」と話をした。現に夏が終わり徐々に涼しくなると、この船は、海賊ごっここの舞台になり、未満児を乗せる乗り物にもなった。何人乗せるかということで数の興味に発展していくなど年間を通して大切な遊びの媒介となるものになっていったのだ。

私自身が、正解のない保育において、保育者と子どもの姿をみて考えながら進めている状態であった。研修の時幼児教育センターの先生に声をかけていただき私もま

た励まされ、背中を押して貰えた。そしてその思いが、若い保育者へと繋がっていったのだと思え、忘れられない言葉となった。

この公開保育は保幼小接続研修として29年度、30年度、令和元年度と確実につながってきた。毎年、小学校、保育所ともに異動があり、担当課や教育委員会も担当者が変わるが、すでにしっかりと研修の形はできている。保育内容においては1日1日が、新しい学びであることを忘れてはならないが、このような機会を持ち、自分たちの保育について語り、一人一人の子どもの育ちについて話し合うことのできる環境が出来てきたことは大きな進歩だと思う。

### 3. 事例を検討する

#### 1) 事例を書くということ

公開保育によって保育を見られることに抵抗がなくなった。何よりそれぞれに工夫して保育をしようとしている。では、更に一人一人の保育を深めていくことをしていくためにはどうするのがいいのか。次の手立てとして保育の記録をとり、そこで何を見取り、保育者は何を考えたのかを事例として文章にしていくことになった。とはいっても、県の幼児教育センターの研修に参加した市町アドバイザーや園内リーダーは事例を書くことを経験しているが、若い保育士たちはその経験もなく、まして日々の業務と日誌記入等で手一杯のようであった。

##### a. 事例を書いてみる

しかし中にはすでに28年度頃より日誌の土曜日の欄を利用して日々の記録を書いている職員もいた。土曜日が希望者保育になってから、土曜日の日誌は別に作成し、日々の週日誌の中の土曜欄は運動会や発表会、参加日の全員の保育の日のみ記入することになっていた。そのため土曜欄は空白だったのである。この日々の記録にサブタイトルを付け繋がる活動を拾い集めていけば、一気に書かなくても事例として成り立つのではないかと。それを提案したのは私だった。私自身現場で保育をしているとき裏面や、空きスペースに個人の記録をメモのように残したりしていたので、形式は気にせず自由に記録に残すことができるのは利点だと思っていた。



## エピソード記録

「子どもの主体性・遊びの繋がり」という視点から保育を振り返るために

- ・ 子どもの言動に感動したことや、魅力を感じたことを意識して書き綴っていく。
- ・ 子どもの姿を捉える目を養うことにも役立った。

週日誌には、月案に基づいた日々の活動、クラス全体の様子などを書き、エピソード記録には、個々の子どもをみて、「はっ」としたことや「へー」と思ったこと、自分の視点や子どもの言葉を拾ったものを書いてみるように提案した。これは子どもをよく見ないと実はかけないし、保育者の心も動かないとかけないのだと後々気が付くのだが、この時はそこまで考えずに提案していたのだった。

ぴっかは更にこれを見直した。事例として拾い集めるためには、それが1枚の紙になっているのが繋がりもわかり活用しやすいと考え、自由記入の用紙を作成し「エピソード記録」として週日誌に挟み込んだのである。ぴっかはまずは自分たちがそれを率先して活用し改良を重ねた。

私の役割は、それを職員に浸透させていくことだった。書き方や使い方は本人たちに任せた。文だけのもの、図入り、写真添付など様々な形のものだったが、毎週提出される週日誌と「エピソード記録」に目を通し、付箋を使ってコメントし、記録の中の保育を楽しんだ。指導ではなく、私が感じたことを書き込んでいくことで、保育者と共感し、さらに保育者自身が書くことを少しでも楽しんでくれるようになってほしいと思ったからだった。この記録によってクラスの保育や、保育者の考えがよく見えるよ

うになったのは言うまでもないことだった。

しかしこれこそ、全体に浸透させていくのは難しかった。個人差が大きく、なかなか書くことが出来ない職員がいた。それぞれの職員の思いもあるので、強制的にならないようにさりげなく話をしようとした。保育中はなかなかゆっくり話をすることは難しかったので、土曜保育当番の休憩時間や、夕方の時間など、様子を見ながら個人的に声をかけ、書きにくさを少しでも解消できるよう話をしていた。指導的にならず、思いに寄り添うことが大切だと、自分に言い聞かせながらの対応だった。なぜ書きにくいかを尋ね、とにかく始めてみようと思背中をおした。これはさすがに、若手のぴっかではなく、私たち管理職の仕事だと思った。

### b. 事例検討をする

平成30年度、紆余曲折有りながらも、春の公開保育・事例検討会で、まずはぴっかのメンバーの記録を使い検討を行った。そして冬の検討会では全員の正保育士が事例を書き各保育所の事例が出揃い、それを使った事例検討会を行うことができたのだった。ぴっかの自分たちがする率先してするという姿勢には頭が下がる。彼らが、先導してくれるから、これも実現できたのだと思う。

事例検討会では、5人程度のグループに分かれ、前半は当日の保育の見取りを付箋に書き、出し合い、園の平面図に張り付け話し合う、後半では、2本程度の事例を基に、それぞれの考えを話し合った。

この検討会で職員たちは笑顔で良く喋るのである。どの保育実践についても様々な見取りがある。必ずしもうまく展開していなかったとしても、その中の子どもの学びの姿と、保育者の援助や、環境設定について話し合うことができた。正解はない。だから自分の考えを話せる。〇〇したらどうだったろうか？など、違う展開を想像することが出来るようになり、また明日からの保育が楽しくなる。そんな研修会の持ち方が出来るようになってきたのである。



年度末には、所長たちで印刷製本をし、1冊の事例集を作成した。初めは、事例集にすることに抵抗があった職員もいたので、記録として置いておくだけのつもりだったが、いざ出来たものを見ると誰もが欲しがった。そしてその事例から前年度の保育の流れを見取ったり、または子どもたちが同じようなものに興味を持った際の参考に

したりするなど、活用していったのである。

### c. 現在のかたち

こうして私たちは一年一年研修を積み重ねてきた。それに伴い課題を見つけ、それを見直すためにはどうすればいいのかと考え一つずつ取り組んできた。

現在では

＜公開保育及び研修＞

春：対象…4 保育所職員（同地区小学校）

日程…5 月下旬から 6 月、4 保育所各 1 日

内容…公開保育・事例検討会

夏：対象…教職員・嶺南 4 町・各関係機関

日程…4 保育所同日開催

内容…公開保育・保小接続研修

冬：対象…4 保育所職員、名田庄こども園

各関係機関

日程…12 月～1 月、3 保育所各 1 日

内容…公開保育・事例検討会・次年度に向けての話し合い

講師…各保育所講師招聘

ここ数年はこのような形で開催されている。2 年目・3 年目は高浜保育所を研究対象として 2 年間継続的に検討していたが、4 年目からは各保育所での取り組みに落ち着いている。それぞれの保育所には地域性、個性や特色があるので、それを生かした保育を模索し続けている。

公開保育を始めて 2 年目くらいで子どもたちの姿が変わったのを感じた。公開保育を始めた当初は、外部の人が来ていることを気にする姿があったが、いつの間にか、誰が来ようという職員に対する態度と同じようになった。遊んでいるところに入ってこられても、気にせず遊び続ける。話しかけられれば普通に返事をする。制作中にアドバイスを貰うことがあれば、受け入れることも有るが、聞かないことも有る。情報の取捨選択ができ自己があると思えた。自分の狙いがあるからほしい情報は入れるが、思いが異なれば入れないのだ。大人の言うことが絶対的でないという姿が育っている。

子ども達の変化は来客に慣れたことも有るだろうが、遊びこむことが出来るようになってきたことと、保育者が指導中心の保育をしなくなったからではないだろうか。一緒に考える、子どもの考えや気持ちを尊重する、その姿勢で保育をすることで子どもの姿が変わってきたのだと私には思えた。

### ～平成 27 年度からの公開保育の変容～

	公開保育場所	参加者・詳細
平成 27 年度	7/16 青郷保育所公開 10/12 高浜保育所公開 12/9 和田保育所公開	＜参加者＞ 町内保育所職員 講師招聘 ＜詳細＞ ・公開保育初年度 ・保育所公開、保育の見取り
平成 28 年度	6/22 高浜保育所公開 7/5 青郷保育所公開 8/19 和田保育所公開 10/24 高浜保育所公開 11/16 内浦保育所公開 12/12 高浜保育所公開 1/18 青郷保育所公開 2/1 和田保育所公開	＜参加者＞ 町内保育所職員 講師招聘(高浜保育所) 各関係機関 ＜詳細＞ 午前：4 保育所において公開保育をする。 午後①：各保育所での午前中の保育の見取り、振り返り（全保育所） 午後②：各保育所の写真を使った事例検討会（於：高浜保育所）
平成 29 年度	6/7 青郷保育所公開 6/13 内浦保育所公開 6/14 和田保育所公開 6/21 高浜保育所公開	＜参加者＞ 講師招聘(高浜保育所) 保育所職員 各関係機関 ＜詳細＞ ・前年度から続く春の様子を見取り当日の保育を話し合う
	8/23 高浜町 4 保育所 同日公開	＜参加者＞ 各小学校教諭 嶺南 4 町へ公開（関係機関と連携） ＜詳細＞ ・保小接続研修として ・保育所の春から現在までの様子を説明、当日の保育と合わせ意見交流を行う
	10/11 高浜保育所公開 12/13 高浜保育所公開	＜参加者＞ 保育所職員 各関係機関

		<詳細> ・高浜保育所の継続検討 ・各保育所の写真を使った事例検討会 ・12月においては次年度への課題検討
平成30年度	6/6 内浦保育所公開 6/13 高浜保育所公開 6/14 青郷保育所公開 6/21 和田保育所公開	<参加者> 保育所職員 各関係機関 <詳細> ・前年度から続く春の様子を見取り当日の保育を話し合う ・実践保育記録による事例検討
	7/31 高浜町4保育所 同日公開	<参加者> 各小学校教諭 嶺南4町へ公開 (関係機関と連携) <詳細> ・保小接続研修として ・保育所の春から現在までの様子を説明、当日の保育と合わせ意見交流を行う
	12/17 青郷保育所公開 1/16 和田保育所公開 1/23 高浜保育所公開	<参加者> 講師招聘 (各保育所) 保育所職員 名田庄こども園職員 各関係機関 <詳細> ・3保育所公開保育の当日の保育の見取り ・当該保育所の正担職員全員の事例検討を4～5人程度の小グループでおこなう
令和元年	5/28 内浦保育所公開 6/6 高浜保育所公開 6/12 和田保育所公開 6/18 青郷保育所公開	<参加者> 町保育所職員 各関係機関 <詳細> ・前年度から続く春の様子を見取り当日の保育を話し合う ・実践保育記録による事例検討

		討
	8/7 高浜町4保育所同 日公開 ・公開保育検討 ・意見交流	<参加者> 各小学校教諭 嶺南4町へ公開 (関係機関と連携) <詳細> ・保小接続研修として ・保育所の春から現在までの様子を説明、当日の保育と合わせ意見交流を行う
	12/13 高浜保育所公開 12/18 和田保育所公開 1/24 青郷保育所公開	<参加者> 講師招聘 保育所職員 各関係機関 名田庄こども園職員 <詳細> ・3保育所公開保育・当日の保育の見取り ・当該保育所の正担職員全員の保育実践記録の検討を4～5人の小グループで行う

### Ⅲ. 日々の保育を考える

公開保育、事例検討など少しずつ模索しながら進めてきたつもりではある。しかし、あくまで目的は子どもが主体的で生き生き活動することである。公開保育も、事例検討会も、エピソード記録をつけることも、その為の手段であることを忘れてはならない。ややもすると勘違いしてしまうのである。大切なのは日々の保育。子どもをよく見、考察し、子どもたちと相談し共に活動する。それを記録に残し、更に考察する。公開保育とはそんな日々の1日を公開するのである。日々の保育が大切にされないとい何の意味もないのでないか。子どもとの振り返りの時間を持つこともしかりである。そのことは常に心に留めておかなければならない。

#### 1. 子どもたちの振り返り

子ども達が主役の保育をするためには、子ども達の声をよく聞こう。その為に子ども達との振り返りを導入していた。附属幼稚園の公開保育に行き見てきたこともあったが、岸野先生から勧められた事がおおきかった。平

成 27 年からの公開保育の頃から始めていたので、子ども達が自分の事を話せるようになってき、自然に友達の話聞く力もついてきた。振り返りの中で出てきた事を皆で共有し、協力し、クラス全体で何かをすることもできるようになってきた。

ある保育士の 5 歳児の振り返りを見てみる。

全員で円に座り初めは保育士が話す。たいていは「今日何して遊んだ？」という口切だ。子ども達が口々に応答するが、自然と誰か 1 人が話すのを聞く形になる。保育士が指名したりすることはこの場面ではほとんどない。人数の多い座談会のイメージか。保育士はメモを取る。「それで」「それから」「ほかのみんなはどう思う」など促しをする。子ども達が口々に話し、適当なところでまとめた役割をする。「じゃあ、明日しようか」とか、「みんなですてみる？」など明日への遊びの誘いをするものもある。時には、子どもの中からまとめた意見が出ることもある。振り返りは、遊びの報告を踏まえて、自分の遊びを話すだけが目的ではなく、友達から遊びを発展させるアイデアをもらったり、時には全員で取り組むことの足がかりになるものである。



いわゆる三角座りをしている子どもばかりではない。子ども達の姿勢はさまざまである。中には集中できていないと思える子どももいる。しかし、自分の興味ある話になると俄然前のめりになる。そこを捉え保育士はその子に発言を求めたりする「〇〇君も一緒にしてたの？」「〇〇君ならどうする？」など話題に引き込んでいく。良く子どもの様子を見ていないと出来ないことである。

あとで何気に「メモを取るのいいね」と担任に話すと、「メモをしないと子どもたちが言ったことや、約束したこと、すぐ忘れるんで。」との返事。なるほど。しかし、その自分の弱点が強みになってることを感じた。子どもたちは担任がメモを取ってくれていることで安心している。受け入れられていることを感じているのが見ている私にも分かったからだ。メモを取るだけでなく、この担任は子どもとの約束を実現させていっている。だから、このメモは尚活きる。しかし、メモを取ることは必然ではない。振り返りにはそれぞれの保育士のスタイルがあり、子ど

もとの協働なのだ。気を付けるのは、子どもの気持ちを大切にすること。そして仲間として存在すること。

こういう振り返りを、今では 2 歳児クラスも時々している。2 歳児の様子を見ていると子どもたちは、初めは大好きな保育者に聞いてもらいたくて話すことが多いように思う。その場合保育者は媒体になり全体に投げかけるよう努めている。次第に『発言する子ども⇔保育者』の形ではなく、『発言する子ども⇔保育者を含むクラスの友達』の形に変化していく。でもそれはいつなのかは分からない。形を求めるのではないのだから。子どもの育ちと共にそれは出来てくるのだ。順番に充てたりすることはほとんどなく、発言したくなる雰囲気、聞こうとする空気観があることが大切になってくる。2 歳児は 2 歳児なりの、3 歳児は 3 歳児の振り返りの姿がある。そして、その担任ごとの違いもあるのである。その個性もまた大切なことである。

## 2. 日常の子どもの声をきくこと

しかし、ここに落とし穴はないか。職員の振り返りが上手になればなるほど、私は不安になった。この振り返りの時間に子どもの発言する声を聴くことで、子ども達を見ているつもりになっていないか。朝、保育所に来てからの活動する子どもの姿の一つひとつを見ているのだろうか。そしてそこに一人一人の課題を見出しているのだろうか。ある時、私は言ってしまった。「振り返りは上手になってきたけど、それがすべてではないと思う。子どもたちがそれぞれに遊んでいるときよく見てる？子ども同士の遊んでいるときの声を聴いてる？」「はい。見てます。」と即座に返事が返ってきた時には驚いた。勿論全員の子どもの見ることは出来ないが、日常の姿を見取することを忘れてはいなかった。その時々の子どもの姿に感動し、疑問を持ち、一緒に悩み、活動する。そんな日常の保育を大切にしようとしているのならそれでいい。どんな人にも完璧はない。この姿勢を忘れてくれないといいと、この時は納得したのだった。

そしてこれは、エピソード記録を書くことになったことで証明されていった部分でもある。

## 3. 連携すること

高浜保育所では、毎朝、職員朝礼を行っていた。はじめの頃は、当日の予定をそれぞれのクラスの正担任から話してもらっていたが、ただ報告するだけのことが多く、遊戯場は空いているか、散歩に行くなどの確認程度でしかなかった。

それでは朝礼でせっかく話していても勿体ないので、今、子どもたちが何の遊びをしているのか、何に興味を持っているのかということを具体的に話すようにした。

## 1) 未満児との連携

未満児の担任が、子どもとともに以上児クラスを訪問することが増えてきた。子ども達に興味を持たせたいと思う遊びや、喜ぶだろうなと思えること、保育者自身も見たいと思うことがあり、積極的にクラス訪問をしたり、意図的に一緒に所庭で遊んだりするようになった。未満児なりに年上児のすることに興味やあこがれを持ち一緒に参加し、また自分のクラスにおいてもその年齢なりの遊びを展開するようになっていった。以上児は未満児が喜んでくれるのが嬉しくて、遊びを發展させていくことも有った。こうして、未満児クラスとも活動が繋がっていった。

いままでも、未満クラスとの交流は勿論あったのだが、それはどちらかの担任が頼んで身体測定の手伝いをしたり、遊びの



時間を共有することで交流をしたりすることだった。保育者が子どもに手伝ってもらうことが目的だったこともあるのではないかな。勿論そのこと自体は否定するものではないのだが。

しかし、今は遊びの發展を考え交流している。ねらいが明らかに異なっているのだ。日常の肅々とした営みも大切ではあるが、子どもの興味、関心を大切にするようになってきたと感じる。こうゆうことも緩やかに変化してきたことの一つだと思う。

## 2) クラス担任を超えて

ある年、新年度になり、クラス替えのあと新しく4歳児担任になったT先生が悩んでいた。男児A君が集中して遊べるものがわからない。T先生が保育環境を設定したり、遊びの素材を用意しておいたりしても、全く保育室におらず、保育室を渡り歩いたりしていることが多いのだった。T君が何かに興味をもって活動しているならそれでも良いと思うが、常につまらなそうな様子で、

振り返りの時間も興味ない顔や態度を露骨にすることが気になっていたのだった。T先生はその悩みを常々口にし、何人かの職員は知っていた。

ある日T先生は、A君が友達に「おれ、白組さんのカエル触れた。」と話しているのを聞いた。「カエルが好きみたいなんです。」とT先生は私に言った。「でも私生き物が苦手で・・・。」私は「生きているカエルは白組さんで経験させてもらうことにして、T先生は違う形のカエルを探してみたらどう？」と言った。保育者それぞれのカラーもあり、必ずしも何でも出来なければならないとは思っていなかった。

T先生は、子ども達とカエル型の玉入れを作ったり、ジャンプで触れるようなカエルをぶら下げたり、カエルアプローチを始めた。T君は少しずつ変わっていった。保育室でカエル玉入れを友達としたり、夕方延長クラスで、カエルグッズの遊びを他クラスの子どもに披露したりしていたという。延長の時間の姿は、延長担任からの情報だった。T先生は、A君のことは気に留めつつ、日常の保育を行っていた。

ある日、T先生が研修でいなかった日、白組のM先生が代替でクラスに入っていた。その日のAくんの様子を語ってくれたところによると「いつも寝る前（休息）絵本読んでもらうんや。今日はこれを読んでほしい。」と言って「かぶと三十郎」の絵本を持ってきたという。

「明日は2を読んでほしい」と言っていたとのことだった。A君はいつも、給食後の休息をするための着替えが遅くなっていた。この絵本に意欲があるならさっさと着替えをするかもしれないと思い翌日約束通り「かぶと三十郎の2」を読んだということだった。こうしてクラス担任がいなくとも報告をしあう事で子どもの意欲をつなげることが出来ていた。以前からクラスの悩みを共有していたからこそであり、いい連携ができていると思えた出来事だった。

T先生のクラスは数か月後の生活発表会で、この「かぶと三十郎」を題材に日常の活動を取り入れた劇遊びをした。A君も積極的に参加していた。時々積極的になりすぎ揉めることはあったが、そこに自分の居場所があり、意欲が感じられる参加の姿だった。A君についてもまだまだ課題はあるが、職員も、子ども自身の育ちも繋がっていると感じられたのだった。

## 3) トップダウンではなく、職員が話し合い決めていくことの意味

年中担任T、今年度異動で変わってきた。4年ほど前にも在籍していたが、比較的小規模な園から倍以上の規模の園に帰ってきたという感じである。

交流のある隣町の公立の認定こども園に公開保育に行く車中の話である。T、「所庭の地面、掘ったらだめですよね？」このT先生のクラスのテラスの続きの地面には雨が降ると水たまりが出来る。実は前年度からできていた水たまりだったが、今年度自分のクラスの子も達は雨上がりの水たまりで遊ぶのが好きで更にどんどん大きくなっていつている。というのだ。そして、地面が掘れていることで、2歳児が躓いて転んだことがあるというのだ。

私は、この水たまりの事は良く知っていた。前年度の年中児も雨上がりには良く遊んでいた。そこに小さい水たまりができてから遊び始め、その中で泥んこ遊びも展開していた。時には土曜保育の子も達も遊んでいた。だから、はじめは小さかった凹みが、かなりの広範囲のものになってきていた。と同時に部分的に深く掘れているところもあった。昨年からいる職員は誰もなにも言わなかった。疑問にも思っていなかったのだろう。子どもが楽しく遊んでいるから。特に危険もないし。でもT先生は感じてしまったのだ。

私が現役の際は、所庭を掘るのは禁止されていた。所庭で運動会は行わないが、練習をする際躓くので、危険であるとの理由であった。かけっこもそうだし、鼓隊などは太鼓をもって行進するので、足元が見えずぼこぼこしていると歩きにくく怪我に通じるというのである。そうだな、と私たちが納得し穴ができかけると、大きくなならないうちに土を入れて均していた。

さて、ならばどうすればいいのだろうか？

私は言った。「私は気にならない。むしろあそこに自然の水たまりが出来ることで、子どもの遊びが広がると思う。」T先生「でも2歳児が躓くんです」「でも、私は、禁止はしない。危険だと思うならみんなで話し合って決めて。」と言った。「そうでないと、公立なんだから管理職が変わる度に、子どもに違うことを言うことになるよ。」次の管理職が来ても、自分たちは、子ども達の事をこのように考えてしているのだと説明して理解を求めるべきだと思っていた。その為には職員間の話しあいによる共通認識が必要だと思っていた。

そうこうしているうちに公開保育園に到着し話は終わった。その園での振り返りの時間、出された話でも同様の事があった。そこでの話題は水の使い方だった。豪快にホースで子どもたちが水遊びをしていた。ホースもシャワ

ーも子どもたちが自由に使えるようだった。その職員は、シャワーやホースの使用程度などを園長に確認していた。園長は「財政的なことも有るが、自分がいるうちは自由に使わせたいと思っている。」と答えていた。子ども達にとっては、楽しそうだったから、それは良かったと思えたが、ほんとにそれでいいのだろうか。私は、来る時の車の中の話も例にだし、職員が子どもの事を考え話し合い、その状況において決めていくのがいいのではないかと自分の考えを言ってみた。例えば降雪量や、雨量が少なく水不足の年もあるだろう。そうゆう時は、制限せざるを得ないではないか。その水の使い方なども、職員が子ども達ともルールを決めていく方法もあるのではないか。現状を示し、みんなで考えを出し合い理由が必然に成れば子ども達にとっても自分たちが決めたこととして自分たちのルールになっていくのではないか。子どもの事は管理職の考えだけで決めるべきではないと思う。大切なのはみんなで話し合うことなのではないか。

帰りの車中再度、水たまりの話になった。一緒に乗っていた別の保育所で1歳児担任のK保育士は「地面がぼこぼこでも、子ども達は大丈夫。むしろそうゆう所をあえて歩く必要がある。」と話していた。後日、その転んだという子どもの担任に尋ねてみた。「地面が掘れていると危険だという話になったの？」「いいえ、私たちは何とも思っていないです。T先生が、危ないですよ？と聞いていましたけど」どうやら具体的な話し合いにはならなかったようである。むしろ、T先生が未満児に気を使っの言葉だったのかもしれない。他年齢への配慮や思いやりはとても大切だ。新しい目での感覚も、疑問も。だからこそお互いの考えを率直に話し合うことが大切なのではないだろうか。その事の子どもにとっての意味・意義を率直に話し合える集団であってほしいと願う。

#### 4. 行事を考える

日々の保育は子どもの声を聞いて一緒に作って行くことが出来るようになってきた。それを運動会や発表会につなげることも意識的にできるようになってきた。しかし相変わらず季節の年間行事については保育者主導で作らせる傾向が多かった。七夕・節分・ひな祭り・・・

例えば、3月3日はひな祭りだからその日に持ち帰らせるためには、所内に飾る日を考えて2月中旬には完成せねば・・・という考え方である。季節を感じることや、行事としての時期を考え目安を持つことは大切なことであ

る。しかし、子どもが作りたくなかったから、興味を持ったから、という理由ではなかった。作りたくなる仕掛けや環境があったのか？家庭のお雛様を見るなどし、作りたいという思いが子どもの中に芽生えてからでもいいのではないか。一斉に準備したものを使い指導して作成させる方法以外ないのか……。持ち帰りは3月3日でないといけないのか。3月中に持ち帰ったのではダメなのか。もしくは、持ち帰りたい子どもから各々持ち帰ることは不平等なのか。方法はどうであれ、そこに子どもの気持ちはどのように存在するのか。そこを問い直し行事を見直してほしいと思った。

作りたい子が作り、それを見て興味を持った子が作り、時間をかけて子どもたちが作りたい気持ちになった時に「みんなも作ってみようか」と声をかける制作活動をしてほしい。同じ一斉活動、一斉製作であっても、子どもの意欲をもってする制作であってほしいと思った。

日々の遊びは子どもの声を聴けるようになったのだから、行事もそのようにできるのではないかと保育士たちに投げてみた。何度も何度も。一つひとつの年間の行事のたびに強制にならない様に声をかけ続けた。

しかしこれもまた大変難しいことのようにであった。保護者への働きかけも必要になり、かなりのエネルギーを要するようだった。しかも行事の製作も長年一斉にしてきたのだから保育者に染みついてしまっているのはしかたないことなのかもしれない。

また行事当日の持ち方についても再考していった。節分とは鬼に豆を投げる事ではない。季節の節目としての意味がある。また鬼には色々な意味がある。怖いばかりではない。過去には虐げられた人々をさす言葉としての意味もあった。鬼も生きているのである。心があるのだ。子どもにはわからずとも、少なくとも保育者は理解してほしい。誤った価値観を植え付けるような行事の持ち方にならないように与え方もよく考えてほしい。そしてまた行事そのものも子どもたちと相談しながら作っていくことは出来ないのだろうか考える。

思うことはいろいろあった。しかし実際保育を行うのは保育者である。いかに私に思いや考えがあろうと、保育する職員の心が動かないといけないのである。それは子ども達と同じだ。決して無理やりさせてはならない。気をつけながら、それでも発信は常にしつづけていた。

## 5. 子どもを支え、子どもに寄り添うとは

私たちは、子ども主体の保育をするために、公開保育

や、事例検討、保幼小の連携・接続について取り組んできた。それはあくまで子どもの主体性を考え、一人一人の子どもの思いを大切にする保育が目標であり、その為の方法としての様々な取り組みだと理解している。

その一つ一つの取り組みは、必然であり、町保育者全体で保育の方向性を確認し合いながら取り組んできたのであるが、それには日々の保育そのものが大切なのである。

### 1)ひとりひとりに寄り添うとは

#### a. K子の場合

運動会、年長は2クラス対抗のリレーをするのが恒例だった。メインイベントでもあった。例年運動会までの日々子どもたちはリレー遊びを楽しみ、勝った、負けたと大いに盛り上がって当日を楽しみにしていた。在る年の年長クラスに脳症からの後天的な障害を持つ子どもがいた。このK子には担当保育者がついていて、クラス対抗のリレーをすることを考えたとき、主担任2人と担当保育者として話し合い、みんなと同じ距離は無理だからと距離を減らした。それは半円走ることのルールが難しいと判断したことが一番の理由だとの事。その提案を聞き、私はその様子を見ることにした。

リレーが始まり、K子もバトンをもらい跳ねるように走り出した。遅い。しかし楽しそう。他児の半分くらいところで次の子どもがバトンを受け継いだ。K子はバトンを渡した後戸惑いの様子を見せた。と私には感じられた。もっと走りたかったのではないかな。なぜ自分はみんなと同じ距離を走らないのか？理解ができていないように思えた。その姿を見て私はショックを受けた。しまったと思った。リレー遊びの終わったあと、3人の保育者にどう感じたか問いかけた。「いい感じです」との返答が返ってきた。競争のバランスの事を言っているようだった。K子の様子については、3人とも触れない。気が付かなかったのか？なにも感じなかったのか？

リレーにおけるクラスの子どもの気持ちも大切だが、K子の気持ちはどうなのだろうか。バランスが第1に大切にする事なのだろうか。K子の戸惑いの姿、悲しそうな目。こんな思いをさせたことに対し自分自身にも腹が立った。一人一人の思いを大切にするとはどう言うことなのか。突きつけられた気がした。無理になっってはならないが、できるのであればみんなと同じだけの距離を走らせてあげたい。十分な言葉を持たない子どもだからこそ、担当保育士には、彼女の心の代弁者になって欲しかった。

た。

私は、その時感じた思いを3人に話した。

その後、担任たちは相談を重ね、何度も何度も遊びの中でリレーを経験し、差を縮めるためにクラスでは作戦が練られ、走る順番も子ども間で相談がなされた。当日は何が有るかわからないとの思いもあり、担任は万全のために代走してくれる子も用意して臨んだ。

K子は楽し気にみんなと同じ距離を走ることができた。しかし差は大きい。脚に自信のある子がアンカーだったが、自分の走りですべて返せるほどの距離ではないことは一目瞭然だった。バトンを受け取った直後、一瞬悔しそうな顔をしたのを見たが、すぐに切り替えたのか全力で走り抜けた。体育館中に大きな大きな声援が飛んでいた。

運動会終わりに、K子の保護者は、私を探し丁寧に「お礼を言われた。担当保育士からも保護者の丁寧な感謝の言葉が報告された。」

この日は確かに感動した。K子の姿にも、最後まで走ったすべての子どもの姿にも、会場の雰囲気にも。しかし、このことを思うとき、同時にいつも試しに走った時のK子のあの顔を思い出すのである。そして今でも申し訳ない気持ちになるのである。

#### b. 場面緘黙児K君の場合

また別の年の年長白組に場面緘黙と診断されたK児がいた。1歳児の時に町内の他園に入所。両親の離婚に伴い母の実家に戻り、年長で転園してきた。

場面緘黙と言われるように場面によっては問題がないように見えることもある。彼は、家庭では母と会話が成立し、近所の友達と会話して一緒に遊ぶ。2歳下の妹とよく動き回り、自由奔放に日々を過ごしている印象。帰りにお迎えに来られた母と園の門を一緒に出るとは殆どなく、自分の通園バックを母に持たせ、時にはそれを放り投げ母に拾わせる。そのすきに兄妹で思い思いに飛び出し、駆け出す。その後を母が追いかけるという構図。玄関先に置いてある横断の旗で戦いごっこをすることもあり、注意すると、2人は旗を放り投げ逃げ出し、母が謝る。母は子どもに振り回されており、妹にとっては兄がモデルとなり同じような行動をとるのだと感じられた。母は言い聞かせることはなく言葉で注意はすれども、その顔も声も笑っている。母の発した言葉は子に届いてはいないと感じられた。そんな状態だが、母はK児の行動も分っていてしている、ふざけている、と感じて

いるのである。

日常の保育所生活においては、友達との交流は有り、一緒に行動し遊ぶこともできる。自分の気に入った友達とは会話をし、集団遊びの場面でも特定の子とは手をつなぎ関わる。しかし自分の思いと異なる子だと、普段は勿論集団遊びの場で誘われても手もつながらず無言でその場を離れる。担任にも自分の気が向くと喋りかけるが、こちらからの問いかけには無表情である。そんな態度であるが、保育所には嫌がることなく毎日来る。担任は彼の思いに寄り添い、少しずつ集団の中に入れるように配慮していた。

9月の運動会に向けての事である。子どもたちと相談して親子障害物走の競技の内容を決めていた。夏の夕涼み会から子ども達は、お化けが大好きになり、お化けをテーマにきめた。子どもたちが、障害物となるお化けを作成し、そのお化けを避けながら、火の玉を持ち親子で障害を越えていくというものだった。K児はクラスの子どもたちとスムーズに障害物走を楽しんでいた。いやむしろ喜々として取り組んでいた。障害物走は問題なくできそうだった。しかし、単純なクラス対抗のリレーには参加しようとしなかった。並ぶ場所にはいるのだが、全くバトンを受け取らないのである。バトンを受け取ったとしても、走らずゆるゆる歩き、時には隅にいき寝転ぶこともあった。年長担任達は困り色々な対応を考えた。担任が並走する。大好きな友達からバトンをもらう。同様に好きな友達にバトンを渡すようにする。など色々に対応を考えた。しかしどれも彼には嵌らない。日はどんどん過ぎてく。母にその旨を話し、最悪参加できない場合もあることを伝えると、「先生が手を引っ張って走ってください」と言われたと言う。母はそうすれば走っているのだ。嫌々でも本児が走るならそれも可能だが、拒否し抵抗する子を引っ張り走ることなど出来ないし、してはいけないことではないのか。ならばどうするか。親子障害物走と同様に、何らかの趣向を凝らすことが出来るのか。私も担任から相談を受け一緒に考えた。障害物走が楽しめるのなら、お化けに因んだ物ならするのではないかと提案をした。一反木綿をリレーバトンにするのはいかがでしょうか？走れば走るほどたなびいて面白いかも。そんなことを話し、そこからは担任に任せられた。

次の日、いつも使っている円バトンに白い布が付いていた。さほど大きくはないが、走るとヒラヒラとはためく。果たしてK児は受け取りゆっくり走りだした。全力疾走ではないが、自分で走ることを選択してくれた。他



児たちも、この一反木綿を喜んで受け入れてくれ、2クラスとも一反木綿をはためかせながら走りバトンはつながっていった。

年長の参加するものはもう一つあり40年前から続いている鼓隊である。マーチングと言えるほどの難しいものではなく、音楽に合わせて一定のリズムを刻みながら歩き簡単な隊形を作る。そのあと停止演奏をし、入場時と同じように行進しながら退場するという一連の流れがある。選曲は自由で、隊形も停止演奏も子どもたちとともに選び考えることが可能なものである。この鼓隊においてのK児は微妙だった。というのはいつも参加しないわけではない。曲は気に入っているのだろう。しかし日によっては隊形を作る際、途中で動かなくなることがあった。彼の行動が日によって違う要因がわからない。本音を言えば、停止演奏は本児が演奏しなくとも立ってしてくれるだけで成り立つ。しかし、隊形はみんなで動くので歩いてくれないと進まず、隊形も崩れ、作ることができない。年長児全員が困るのである。実際K児の後ろの子どもはいつも怒っていた。何度も書くが母はできているのでその状態を話しても相談にならなかった。しかし、ここでも一反木綿が活躍する。ある日遅れがちながら、自力で動いているK児がいた。リレーの時の一反木綿と同様なものがK児の太鼓に括り付けられていた。これは全員には付けていないので、周りから見えないようなところに付けるという配慮もされていた。K児にはそれで良かったようである。その後も少し間隔は開いたりはあるが、保育者が多少援助することで練習に参加し、当日も止まることなく参加してくれたのである。

1年間このクラスでは、K君を仲間と認め、K君が参加できるように子どもたちと共に模索しながらすべての行事を進めていったのだった。

### c. A子の場合

ある年度の年長クラス、4年保育の女儿A子。大人しく、無口。数人の友達や、家族とは話す。5歳児クラスになってから、担任が男性保育士になり、彼の声が大きいと言って、叱られたわけでもないのに大泣きをするような子だった。対抗リレーで負ければそのたび大泣きし、友達と話をしている時にも自分の思いを聞き入れてもらおうと大声で泣く事もあった。担任のU先生は、根気よく付き合い、かなり気も使っていた。担任との関係

は承認しつつも、私は気を使いすぎやさしくしすぎるのは、A子にとっても良くないことだと思い、大泣きをした時を捉えて本児と話をした。2人きりになり泣き止むのを待ってから「悔しかったり、悲しかったりして泣くのはいい。我慢する必要もないし泣けばいい。けれど大声で泣いても結果は変わらない。だから誰かに何とかしてもらおうと思って泣くのは違う気がする。」とゆっくり話をした。慰めるのではなく、叱るでもない。自分の泣くという行為の意味を考えさせてみようと思った。その後も泣かなくなるわけはなかった。泣かなくなるのを期待していたわけでもなかったが、大声で泣くことは減ってきたと担任からの報告があった。同時にU先生は、相変わらず根気よく彼女に寄り添っていた。A子が遊んでいる様子を認め、見守っていた。

数か月たった頃だろうか、A子が振り返りの時間にクラスの中で自分の遊びを発表したというのだ。U先生がA子の遊びを認め見守り続けていたことで、自信になったのだと思えた。小学生になったA子だが今もクラスの中で発言できているという。U先生が認め寄り添ったことは大きかったのだと思う。絶対的な味方のU先生がいたから安心して自分を出せた。そしてまたU先生とは違う私との関係も彼女を成長させる遠因になったと密かに思っているのである。

## 2)信頼関係を考える

### a. 発表会の事

ある年度の発表会。年中児担任のM先生はピアノが苦手だった。この年も2曲、練習に練習を重ねてもなお安定感のない伴奏だった。ステージで歌うようになっても、ハラハラさは変わらなかった。私たちがそう思うのだから歌っている子どもは尚更だろう。チラチラとピアノを弾く担任を伺いながらリハーサルをしていたのだった。

発表会本番、私たちもドキドキしながら見守った。相変わらずの不安定なピアノ伴奏だったが、子ども達が違った。まっすぐ正面を向き、いつもにも増して大きい声で一生けん命に歌うのだ。昨日までの姿との違いに唖然とした。そして私なりに納得した。子ども達は担任を守ろうとしているのではないかな。きっとそうだ。

心配な伴奏だったが大きな失敗もなくおわり、たくさんの拍手をもらい子どもたちと担任が退場した後、入れ替わりの時間を利用して、私はこの時感じたことを保護

者に向けて話をした。昨日までの子どもの様子と、本日の子どもの様子の違いを話し、「担任のピアノを子どもたちがカバーしようとしていると私は感じました。ピアノの技術はともかく、こんな信頼関係を築くことが出来ていることは素晴らしいと感じました。」「子どもたちに感謝です。」というようなことを言った。

時々私は職員と子ども達の間を素晴らしいと保護者にむけて言うてしまうことがある。いいのかわからないが、保護者の方も是非知ってほしいと思うからだ。担任もいいが、子ども達が素晴らしいのだ。物事の出来の良し悪しより、助け合うことが出来ること、誰かのために精一杯の自分を出そうとする。純粋で力強い、そういう子どもの育ちの姿も保護者とともに一緒に感じていきたいのだ。

## b. 修了式の事

修了式には、年長 1 年間の子どもの写真をアルバムにして記念品とし授与することになっている。この年も同様に準備され、リハーサルも何度か行い当日を迎えた。式次第の一番初めの記念品授与。白組の記念品授与が終わり、次は緑組の授与の番になった。名前を呼ぶためのクラス担任が交代し、所長補佐が緑組の子どもの記念品を 7 冊程度演題の上に運び、粛々と準備が整うと緑組 1 番目の子どもの名前が呼ばれた。名前を呼ばれた子どもが立ち上がり歩きだした。私はさりげなくいつものように、小さく貼り付けてある漢字の氏名を確認した。「!？」一番上は違う。積みあがっている他の記念品の中にも見つけられない。2 番目の子どもの物も見当たらない。ステージの下にいる所長補佐に声を出さず「ない。」とアクションをした。瞬時には意味が分からなかったようだが、なんとか理解したようで次に運ぶためのアルバムの山の中を探し始めた。私は考えた。年長児の殆どは漢字を読めない、このまま違う子どもの物を渡すべきか。否、自分の漢字の名前を読める子どもも何人かはいる。気が付いてざわつくかもしれない。それに後からみんなで交換するのか。興ざめである。子どもたちは嬉しくないだろう。そしてそんなふうこの状態を誤魔化していいのか。そんなことを考えているうちに、緑組 1 番目の子どもは、段上に上がってきており、私の目の前にいた。私は決めた。小声で「少し待ってね。」と言った。何が待てと言われていいのか分からないまま、とにかく A ちゃんは私と見つめ合いながら立っていてくれた。普通に、静かに、立っていてくれた。そして他の 2 つのクラスの年長児全員が、勿論

保護者も誰一人何も言わず、静かに待っていてくれたのだ。それはどのくらいの時間だったろう 2～3 分だったろうか。私にはとてつもなく長い時間に思えたのだが。なんとか A ちゃんの記念品が壇上に届き、次の子どもたちの為に名簿順に並んだ記念品が粛々と運ばれてきた。必死に名簿と付き合わせたのであろう、2 人目からはスムーズであった。

式次第ではその直後私が挨拶をすることになっていた。この年も、修了式のための挨拶を考え準備していたが、私はそれを使わなかった。何が起こったのか分からないまま、待っていてくれた子どもたちと、保護者に今起こっていたことを伝えようと思ったからだった。何事もなかったように修了式を進めていくこともできた。しかし私は、いつものようにお祝いの言葉を言った後、正直に記念品が順番になっていなかった為、皆さんを待たせてしまったのだと詫言した。「人は失敗をします。その時どのように対応するかも大切なことなのです。」「何もわからないのに、静かに待っていてくれてありがとうございます。先生たちを信じて待っていてくれたことを感謝いたします。」そして、来賓として参列してくださっている小学校の校長先生に向かって「子どもたちはこのような場面でも担任や保育所を信じて静かに待っていてくれました。場に応じた態度をとることができる素晴らしい子どもたちです。自信をもって小学校に送り出せます。どうぞよろしくお願いします」と話した。今もあの時の私の判断、対応がこれで良かったのか分からない。しかし今でも子どもたちには感謝してもしきれないでいる。そして自画自賛ではあるが、このような信頼関係を築いてくれた担任にも感謝しているのである。

余談ではあるが、そんな子どもたちが、小学校へ上がった 1 年生で学級崩壊を起こしたのである。

## IV. 今思うこと

保育を見直そう、ただその思いだけでスタートした私たち。これは今思えば、ある意味無謀な挑戦だったと思う。向かうべきところも漠然としており、何をどうすればいいのか確固とした方法もわからない。一つひとつ、目の前の子どもの姿を見ながら考えていくしかなかった。目の前の一人ひとりの子どもの姿を見取り、考えを話し合う。悩み、工夫し、失敗し、語り合う。そうしながら職員全体の意思統一を図ってきた。1 年 1 年が積み重ねだった。まだまだ課題はある。しかし少なくとも子どもの「〇〇していいですか?」という許可を求める言

葉は無くなり、自己決定の言葉に代わってきた。安全だけを求めた管理的な保育は少しずつなくなってきた。それには子ども自身の自己判断が必然である。子ども達は自分のしたい遊びを中心に、自分自身で考えながら生活する。保育者は子ども達の持っている力を信じ、見守り、寄り添い子ども自身のやりたい遊びを援助する中で設定保育や、一斉活動の方法の有り方をも考え模索する。これからもそんな保育をみんなで話し合い一つひとつ進めていってほしいと願う。

保育をすることは楽しいのである。保育を語りあうことは楽しいのである。私はまず職員にそのことを感じてほしかった。仕事ではあるが、子どもと過ごす時間を楽しんでほしい。子ども達と共に協力して何かを作る事も、共に笑うことも、時に悲しい気持ちや悔しい気持ちを共有することも、そのすべての時間が貴重であたたかい。だから私たちはこの仕事を選んだのだ。

保育者がクラスの子ども達の思いを汲み、やりたい遊びを共に楽しみ、一人一人を大切に作る保育を心掛けている。私も同じように、職員一人一人の思いや考えを認めていこう。そのことが、私が管理職として一番大切にしてきたことだったように今改めて思う。

#### [参考文献]

保育所保育指針解説(平成 30 年 3 月) 厚生労働省編

幼稚園教育要領開設(平成 30 年 3 月) 文部科学省

木村優・岸野麻衣編(2019)「ワードマップ授業研究 実践を変え、理論を改新する」,新曜社

デボラマイヤー,北田佳子訳(2011)「学校を変える力 イースト・ハーレムの小さな挑戦」,岩波書店

斉藤喜博著(1990)「学校づくりの記」国土社

伊那小学校(2012)「内から育つ子ら」- 小学校低学年における総合学習の展開-, 一般社団法人信州教育出版社

エティエンヌ・ウエンガー,リチャード・マクダーモット,ウィリアム・M・スナイダー(2002),櫻井祐子訳,「コミュニティ・オブ・プラクティス」,株式会社翔泳社

ピーター・M・センゲ,枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子訳,(2011)「学習する組織 システム思考で未来で創造する」,英治出版株式会社